2020年では終わらせない東京オリンピック

香川県立観音寺第一高等学校1年　田井　涼子

はじめに

2020年、私が19歳になった時、日本で2度目のオリンピックを東京都で行うことが決定した。オリンピックは4年ごとに夏季と冬季に分けて開催される世界一大きなスポーツの祭典である。日本ではかつて1964年に夏季オリンピックを東京都で、冬季オリンピックを1972年に札幌、1998年に長野県で開催している。2020年の夏季オリンピックの開催地が東京都に決定したことで、オリンピックがより身近なものとなり友人とオリンピックについて話す機会が増えた。私も友人も3年後の東京オリンピックが待ち遠しくてしかたがない。1964年、高度経済成長期の中、開催された東京オリンピックは日本に大きな経済的効果をもたらした。だが、2020年の東京オリンピックは1964年ほどの経済効果は望めないだろう。

東京都から遠く離れた香川県でオリンピックを楽しむのはもちろん、オリンピック開催後もその効果を継続させるにはどうすればよいのかを考察したい。

1. 香川県でオリンピックを楽しむ

1964年、アジア地域初のオリンピックが東京で開催された。当時、日本はまだ敗戦から19年しかたっておらず、オリンピックに向けて、インフラは急速に整備されていった。アジア地域での初開催というだけでなく、通信衛星によるテレビ中継も初めて行われ、近代五輪の歴史上、東京五輪はまさに時代を画する大会だったといえる[1]。経済面ではテレビ中継が行われたことで、テレビが普及した。（グラフ1）当時、一家にテレビは一台が主流だったため、一台のテレビの周りに家族や親戚などが集まり、皆で観戦していた。しかし、現代はどうだろうか。現代では一家に一台どころか、各自の部屋にテレビがあることも珍しくない。昔はテレビを中心にみんなが集っていたが、現代はそのような機会が減ってきているのではないか。一人でテレビの前に座り、応援するのはなんだか寂しいような気がする。テレビやスマートフォンが普及している今だからこそ、一つの場所に集まり皆で観戦し応援する場を設けてはどうだろうか。そうすれば、一人で見る時にはない他者との交流が生まれ、人とのつながりができる。人とのつながりを大切にすることこそ私たちにとって忘れてはならないことなのではないか。

グラフ１

スクリーンはただ大きいというだけでなく、発展した技術を生かし、3Dで観戦できるようにすれば、必ず盛り上がるにちがいない。臨場感あふれる3Dであれば、東京都から遠

く離れた香川県からでも十分、大人だけでなく子どもたちも楽しむことができると思う。そして、100 メートル走を 10 秒で走る速さや高跳のバーを飛び越える瞬間などを体感できる体験型の機械を導入すれば、より皆でオリンピックを楽しむことができるのではないか。また、優先席を設置するなどし、高齢者が集まれるようにすれば、子どもからお年寄りまでその地域の幅広い年齢層の人々が集い、オリンピックというイベントを通して交流できることになる。高齢者の人にとっても集まる場ができることで、話す機会や楽しみを共有できる仲間が増え、生き甲斐へとつながるのではないか。

2. 香川県で異文化に触れる

香川県は現在、訪日外国人観光客から大きな注目を集めている。3 年に一度開催される瀬戸内国際芸術祭への関心も高まってきており、「瀬戸内国際芸術祭 2016」[2]では来場者の 13.4%が外国人観光客であったと確認されている。また、来場者のうち、全体の 40.9%をリピーターが占めている[3]。2020 年の東京オリンピックを機に、たくさんの外国人が日本に訪れるだろう。その外国人が香川県にも足を運んでくれれば、香川県の国際的な認知度は更に上がるにちがいない。そのために、2020 年の東京オリンピック開催に合わせて瀬戸内国際芸術祭を開くのはどうだろうか。海外からの関心が高まりリピーターが増えている現在、瀬戸内国際芸術祭を開くことで更に多くの外国人が訪れ、県内の観光地を訪問する人が増えることも期待できるのではないか。

まず、瀬戸内国際芸術祭を開催するためにすべきことは 2020 年までの 3 年間でしっかりと海外へ広告することである。出発前に得た旅行情報源で役に立ったものとして挙げられている多くは SNS やブログなどのインターネットである[4]。香川県の現在の PR 動画を英訳し、瀬戸内国際芸術祭などの情報も加えた動画を、全世界の人々が見ることができる YouTube などに投稿したり、高校生である私たちから見た香川県の良さを動画を通じて英語で伝えたりするのはどうだろうか。高校生が香川県を紹介することで高校生の地元に対する意識も変わり、大人だけでなく高校生も含めた香川県全体で香川県の国際化を取り組むことができると思う。

次に、訪れた外国人が泊まる場所を作らなくてはならない。香川県の平成 25 年の空き家率は 16.6 パーセントと全国で 4 番目に高い[5]。この空き家を宿泊所として有効的に利用すれば、雇用促進につながり、経済効果も期待できる。また、短期間でもシェアハウスにすることで、相互の異文化を理解するきっかけになるし、香川県の魅力を直接伝えることができる良い機会にもなる。友情を育むことができれば、もう一度会いに行きたいと香川県へのつながりをより強く感じてくれるだろう。

そして、外国人にとってより過ごしやすい香川県にするためには、2014 年に訪問客が困ったこととして挙げられている[6]①Wi-Fi の少なさ②コミュニケーションがとれない、主にこの二つの課題を解決する必要がある。①の解決策は Wi-Fi をお店などにつないだり、無料 Wi-Fi スポットを増やしたりする。香川県に訪れる外国人の割合で最も多いのは、台湾

であり次に多いのは韓国である[7]。したがって英語だけでなく、中国語や韓国語の標識や看板を増やすことが、②を解消する一つの策であろう。瀬戸内国際芸術祭で展示するアートは来場者とともに作り上げる体験型アートや、においや触感など障がいをもった人でも楽しむことのできるアートにすることで皆が楽しむことができ、心に残るものになるのではないか。また、香川県の昔話の絵本に出てくるような山や、穏やかな海に浮かぶ島々などを生かし、今流行っている SNS 栄えする写真のスポットをいくつか作るとより盛り上がると思う。

3. 香川を暮らしやすい町にする

2020 年東京でパラリンピックも開催される。その準備には障がい者にとって過ごしやすい最新の施設や設備の工夫がなされるだろう。そして、そのことは施設や設備などのハード面だけではなく、障がい者への関心の高まりにつながっていくだろう。香川県でも障がい者への関心を高め、そのノウハウを香川県の町づくりに生かしていくべきだ。香川県の平成 29 年版の老年人口比率は 29.9%で[8]、これからますます高齢化が進むことが予想される。障がい者の人たちにとって暮らしやすい町づくりは、高齢者にとっても暮らしやすい町づくりになり、高齢化が進んでいる香川県を将来にわたって暮らしやすい町にしてくれるだろう。

4. まとめ

香川県で東京オリンピックを楽しむことで、地域の人々のつながりを取り戻す。瀬戸内国際芸術祭を同時開催し外国人観光客のリピーターを増やすことで、香川県にいながら異文化に触れることができるし、経済効果も得られる。また、障がい者にも、高齢者にも暮らしやすい町になる。このように、オリンピックを契機として得られた人とのつながりや文化の広がり、暮らしやすい町づくりはオリンピックが終わっても続いていくだろう。
「2020 年では終わらせない」、そういうオリンピックにするために、私を含めそれぞれの立場でオリンピックと向き合い、関わっていくべきだ。

グラフ 1：内閣府,主要耐久消費財等の普及率

[1] 参考文献　小川勝(2016)　東京オリンピック「問題」の核心は何か
[2] 瀬戸内国際芸術祭 2016　総括報告
[3] SHIKOKUNEWS
[4] 観光庁「訪日外国人消費動向（平成 29 年 1-3 月期）」より
[5] 総務省統計局「平成 25 年住宅・土地統計調査速報集計」
[6] 観光庁「外国人旅行者に対するアンケート調査結果について」
[7] 日本経済新聞
[8] 香川県統計情報データーベース　100 の指標から見た香川(平成 29 年版)